様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２５１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３８０９４９

研究課題名（和文）思春期女子における学業成績と自己概念形成プロセス－進路決定の支援に向けて－

研究課題名（英文）Academic Achievement and Self-concept Formation Process in Adolescent Girls

研究代表者
相良　順子（SAGARA, Junko）

聖徳大学・児童学部・教授

研究者番号：２０３２３８６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、思春期女子において自己評価が低下する要因は何かを探ることであった。女子中高一貫校の生徒2コホートを対象に、自己評価など自己概念に関する評価や抑うつ傾向、学業成績や進路との関連について3年間縦断的に検討した結果、中学1年から2年にかけて自己評価は著しく低下し、その背景として学業成績よりも対人関係での自信喪失と抑うつ傾向の高まりが関係していること、高校生の受験校の決定は心理的な自己評価と異なる次元で行われていることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
まず、学術的には、思春期の女子の自己評価の低下に関する研究は多いが、学業成績や学業的自己概念を要因としてとりあげ、他の心理的要因との関連を縦断的に検討した研究は見当たらず、中学、高校における女子の自己概念に関する重要な示唆をもたらした点で意義があるといえる。
社会的には、今日、女性の活躍が期待されている一方で、思春期女子の自信が低下することが知られている。本研究は、女性が男性以上に意欲をもって活躍しようとする動機を高める上で示唆をもたらした点で、社会的意義があるといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to find out what causes self-worth decline in adolescent girls. As a result of examining the relationship between self-worth, depression tendency, and academic performance through analysis of 3 years' longitudinal data of 2 cohorts of junior high school girls, it was suggested that the self-worth of junior high school first graders would be significantly lower in the second grader, and that the decline would be related to the loss of interpersonal self-confidence and heightened depressive tendency rather than academic performance as a background, and the choice of university was not based on their psychological self-worth.

研究分野：発達心理学

キーワード：思春期　女子　縦断研究　自己評価　学力　コンピテンス　抑うつ

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

職業選択において男女差がなくなったかのように見える現在の社会でも、今なお思春期の女子が男子にくらべて自己評価が低下することが多くの研究で指摘されてきた。たとえば、同じ学力水準にあっても女子は男子よりも学力の自己評価が低いことが知られていたが、これは女子の進路選択にも重大な影響があると考えられる。自己評価の低下は、学力をはじめ自己認知に関係するコンピテンスや動機づけが影響していると考えられるが、女子の自己評価がどのような要因で形成されるかについて研究が少なく、また、特に学力との関連を扱った長期の縦断研究は見当たらなかった。自己評価の低下について、学力と自己に関する心理的な要因を広く縦断的に検討し、女子が自分にふさわしい進路選択ができるような援助への示唆を探る必要があった。

２．研究の目的

本研究の目的は、思春期の女子の自己概念のひとつである自己評価がどのように形成されるのかについて、学力をはじめ、学力についての主観的な評価である学業的自己概念、社会コンピテンス、抑うつ傾向、価値観、親の進学への期待認知、達成動機など自己概念に関連する広い領域の心理的変数をもとに明らかにすることが目的である。具体的には、中高一貫校で実施されている学力テストのデータと質問紙調査結果を 4 年間分蓄積し、どのような要因が女子中高生のキャリア選択にかかわる自己概念を規定するのかについて明らかにすることであった。

３．研究の方法

研究は、質問紙調査で行った。対象は、研究協力高である女子中高一貫校に通う、中学 1 年生から 3 年生、高校 1 年生から 3 年生。手続きとしては、平成 26 年から平成 30 年までの毎年 7 月と 2 月に調査を行った。調査票は、担任を通じて配布、回収された。学力に関しては、毎年協力校が実施している標準学力検査の結果（偏差値）を使用した。調査内容は、①自己価値（コンピテンス尺度の自己価値）②社会コンピテンス③抑うつ傾向④自己呈示欲求（賞賛獲得欲求、拒否回避欲求）⑤学業的自己概念⑥達成動機（自己充実的達成動機、競争的達成動機）⑦父親、母親からの期待⑧価値観⑨受験校の選択であった。分析の対象としたのは、201X 年と 201X+1 年に中学または高校に入学した生徒の 3 年間の縦断データであった。

４．研究成果

(1)自己評価の推移　（中学、高校 3 年間 2 コホート縦断データ）

自己評価は中学１年から 2 年の間で著しく低下し、その後は低いままであること、高校では自己評価は低いまま推移することが明らかとなった（図 1-1、1-2 参照）。

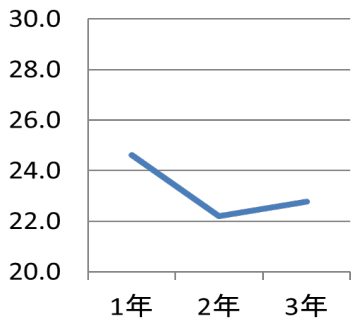

図 1-1 中学生の自己価値の推移

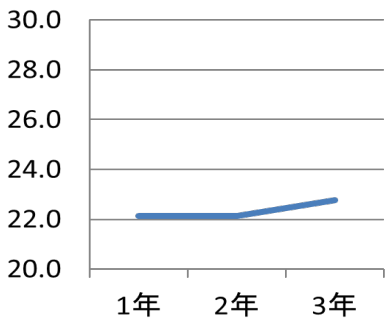

図 1-2　高校生の自己価値の推移

(2)自己評価と社会コンピテンス　（中学 3 年間１コホート縦断データ）

中学１年生から 3 年間の縦断データから、中学１年と 2 年生の間の自己価値の変動により①減少大群②減少小群③増加群の 3 群 57 名について、その推移をみた（図 2 参照）。その結果、自己価値の変化は個人差が大きく、中１から中２にかけて大きく自己価値を下げる群がいることが示された。また、1 年次での自己価値と社会コンピテンスとの相関は、$r = .68^{***}$と高く、女子中学生の自己価値が社会コンピテンスと密接に関連していることが示された。この結果は、1 年後の入学者であるもう一つのコホートでも得られ、女子の対人関係の自己価値に及ぼす影響の大きさを報告している先行の研究を支持していた。

(3)自己評価と抑うつとの関連　（中学 3 年間 2 コホート縦断データ）

(2)において、中学生1年生から2年生の自己価値の推移に個人差が大きいことが示されたが、この自己価値と抑うつ傾向はどう関連するか 2 コホート 76 名を対象に検討した。抑うつ傾向の平均値は中学１年から学年が上がるにつれて増加した。さらに、抑うつ得点が臨床群に該当する生徒の 3 年間の得点の推移に対しクラスター分析を行ったところ、中学１年から一貫して得点が高い群と中学 2 年から 3 年の間に急上昇する群が抽出された。中学生の間に抑うつ傾向は全体的に高まる背景に、急に抑うつが上昇する生徒群がいることが示唆された。

(4) 学力と学業的自己概念

1) 自己価値との関連（高校 1 コホート横断データ）

201X 年入学の高校生 464 名の自己価値と学力、学業的自己概念の関連を検討した結果、生徒の自己評価は、学力よりもその自己評価である学業的自己概念との関連が強かった。特に、英語の学力の上位者において、自己評価と学業的自己概念との間に密接な関係がみられた。次に、学業成績と学業的自己概念のずれに注目し、学力上位下位と学業的自己概念が「苦手」「ふつう」「得意」の 3 群との組み合わせにより、生徒の自己価値及び達成動機について検討した。その結果、特に英語において、成績は上位にもかかわらず「苦手」と報告する生徒は「得意」とする生徒より自己価値が低く、自分なりの目標を達成したいという自己充実達成動機が低いことが示された（図 3 中↓参照）。

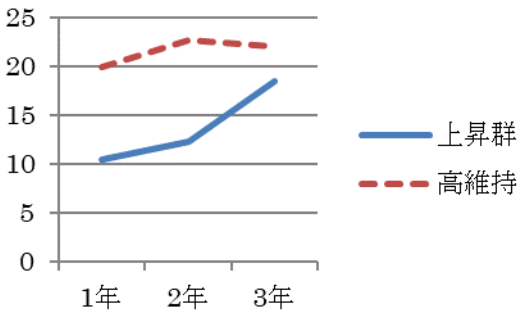

図 2　中学 3 年間の抑うつ臨床群の得点の推移

さらに、英語の成績が上位にもかかわらず、「不得意」と自己評価する群では、抑うつ傾向が他の群よりも高かった。英語は生徒にとって自己関与度が高い科目であるために、自己価値を含めた自己概念が反映されたと考えられる。

2) 学力と学業的自己概念との因果関係の検討　（高校 3 年間縦断データ）

高校生 2 コホートの 298 名の 3 年間の学力と学業的自己概念について因果モデルをたて、検討した。その結果、文系の数学において、1 年次の成績が 1 年次の学業的自己概念に影響し、それが 2 年次の成績へ、2 年次の成績が学業的自己概念に影響し、3 年次の学業に影響するという関係が認められた(Miyamoto & Sagara,2018)。1 年次の成績がその後の学業的自己概念と成績に影響することから、1 年次での援助が重要であるといえる（図 4 参照）。

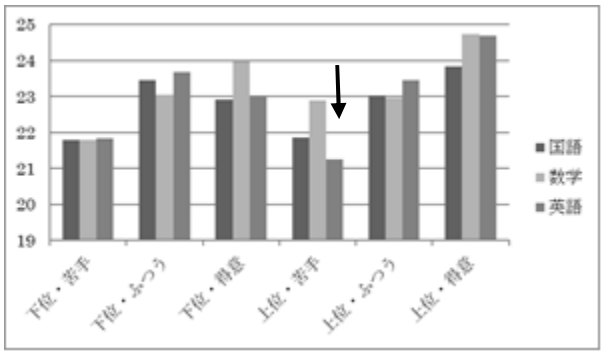

図 3　高校における学力と学業的自己概念の組み合わせによる自己価値

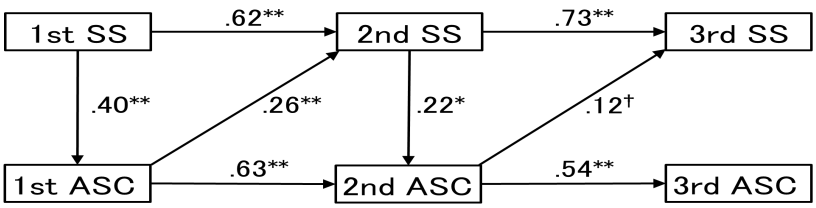

図 4　高校 3 年間の学力（SS）と学業的自己概念（ASC）の関連モデル

(5) 自己価値と進路決定について（高校 3 年生）

キャリア探索においては、自己決定の程度が高いほど積極的に行われることが指摘されている。高校生の受験行動も、自己決定がなされるほど、受験での挑戦が起こると推測される。そこで、高校 3 年生 159 名を対象に、受験行動における自己決定の度合いと自己価値および精神的健康の指標である抑うつとの関係を検討した。その結果、受験での自己決定が高い生徒ほど、挑戦行動は高く、抑うつが低いことが相関分析で示された(相良他,2016)。しかし、実際に受験した大学のレベルを高校 3 年次の担任に評価してもらったところ、自己のレベルより高い大学を受験した生徒は、低いレベルを選択した生徒より抑うつ得点が有意に高かった。これより抑うつ傾向は、自己評価を下げるが、受験校のレベルを下げる行動には関係ないことが示唆された。

(6) 親の期待と学力（高校 3 年間 1 コホート縦断データ）

201X 年に入学した高校 1 年生で 3 年間のデータがそろっている 173 名を対象に、父親と母親の進学期待と国語、数学、英語の偏差値との 3 時点の関連を検討した。父親と母親の得点の相関が高かったため、母親の期待得点を親の期待得点として関連モデルを検討した。その結果、

学力は１年次から２年次、２年次から３年次で.63～.87 の高いパス係数が、親の期待は学年間で.42 から.59 中程度のパス係数が得られた。また、3 教科に共通して１年次の偏差値から１年次の親の期待へパスが有意であった。国語に関しては、2 年次の偏差値が親の期待を介して 3 年次の偏差値に影響するという関連が示された。中学から環境が変化する高校入学間もない学力はその後の子ども自身が認知する親の期待に影響することが示された点で、1 年次の成績が重要であることが示唆された。

⑺ 自己価値と価値観、達成動機、社会的コンピテンスとの関連モデルの検討（中学、高校各学年２コホート横断データ）

中学、高校の各学年２コホートを対象に、価値観、達成動機、社会的コンピテンスが自己価値に及ぼす関連モデルを想定し、検討した。その結果、中学生は、社会の価値の気づきが高いほど、達成動機が高まり、達成動機のうち、充実的達成動機は社会コンピテンスを高め、競争的達成動機は学力を高め、社会的コンピテンスと学力の高さは自己価値を高めるという関連モデルが支持された。高校生は、どの学年も学力から自己価値への影響は見られず、社会的コンピテンスのみが自己価値に影響するという点が中学生と異なっていた（図５参照）。これからより、思春期女子の自己価値を高めるためには、達成動機を高めることが重要であることが示唆された。

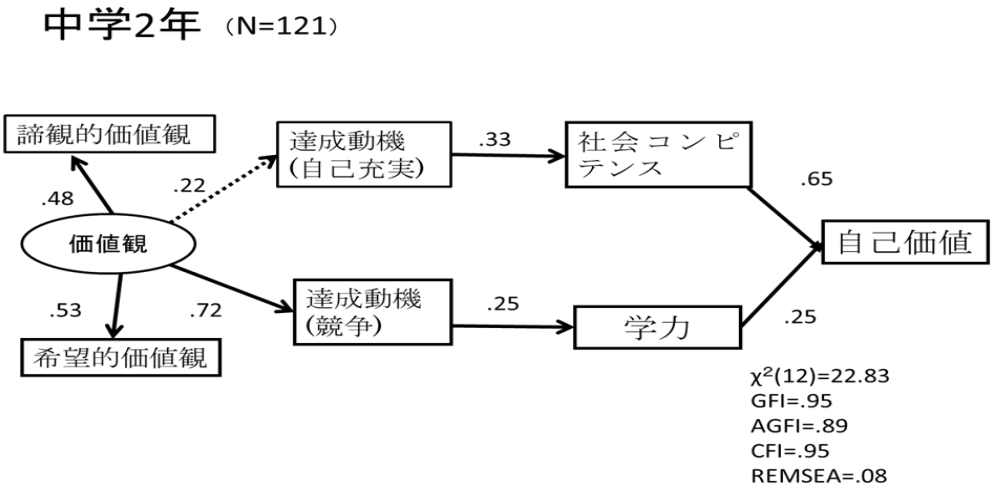

図５　中学２年生における関連モデルの結果

以上、本研究における１または２コホートについての横断および３年間の縦断研究の結果から、思春期女子の自己価値の低下は、個人差が大きく、この時期における抑うつ傾向の高まりが対人関係のコンピテンスに影響し、自己評価が下がることが考えられる。しかし、一方で、中学校では、学力の高さと自己価値の高さが関係し、中学校、高校と共通して達成動機の高まりが自己価値を高めることが示唆されたことは意義がある。中学、高校生の女子においては、抑うつ傾向を高めないような環境をつくることが重要ではないだろうか。特に、高校１年生の学力がその後の学業的自己概念や学力の向上につながる点では、重要な学年といえる。対人関係の有能感だけでなく、将来のキャリアを見据えた学業での取り組みや、自分なりの目標をもってそれに向かうことの重要性を教育現場で伝えていくことが重要であると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 宮本友弘・相良順子、女子高校生における内的準拠枠による学業的自己概念の形成－Ｉ/Ｅモデルに基づく分析－東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要、査読有、4、99-106、2018

② 相良順子・宮本友弘・鈴木悦子・川並芳純、女子高校生における親の期待と学力－3 年間の縦断研究－聖徳大学研究紀要、査読有、28、1-5、2018

③ 相良順子・宮本友弘・鈴木悦子・川並芳純、女子高校生の大学受験行動における心理的特性および学力の影響－自己決定と挑戦に注目して－聖徳大学研究紀要、査読有、27、7-10、2017

④ 相良順子・宮本友弘・鈴木悦子・川並芳純、女子高校生の学力認知と自己評価－自己呈示欲求と達成動機との関連－聖徳大学研究紀要、査読有、26、33-38、2016

〔学会発表〕（計 16 件）

① 相良順子・宮本友弘・鈴木悦子、「中高女子の自己評価と適応－3 年間の縦断データから－」日本心理学会シンポジウム企画、開催、2018

② 相良順子、「達成動機とジェンダー」、教育心理学会シンポジウム話題提供、2018

③ 宮本友弘・相良順子・鈴木悦子、「女子高校生における学業成績と学業的自己概念のズレと抑うつ傾向の関連－3 年間の縦断データから－」、日本教育心理学会、2018

④ Junko Sagara & Tomohiro Miyamoto, Three-Year Longitudinal Study of Parents' Expectations and Academic Attainment of Female High School Students, International Congress of Applied Psychology, 2018

⑤ Tomohiro Miyamoto & Junko Sagara, Causal Ordering between Academic Self-Concept and Academic Performance in Japanese Female High-School Students: Data from a Three-year Longitudinal Study, International Congress of Applied Psychology, 2018

⑥ 鈴木悦子・相良順子・宮本友弘、女子中学生におけるスクールカウンセラー利用者の心理的特徴－自己評価に着目して－、日本心理臨床学会、2017

⑦ 相良順子・宮本友弘・鈴木悦子、中・高校生女子における学業的自己概念と自己価値、日本教育心理学会、2017

⑧ 宮本友弘・相良順子・鈴木悦子、女子高校生における学業的自己概念の内的な準拠枠－教科の個人内比較に着目して－、日本教育心理学会、2017

⑨ 相良順子・鈴木悦子、女子中学生の自己価値の推移と対人関係要因－3 年間の縦断データより－、日本心理学会、2017

⑩ Junko Sagara, Tomohiro Miyamoto, Etsuko Suzuki, Depressive tendencies and relative factors in high school girls (1) -Focusing on self-evaluation and academic performance-, International Congress of Psychology ,2016

⑪ Tomohiro Miyamoto, Junko Sagara, Etsuko Suzuki, Depressive tendencies and relative factors in high school girls (2)-Focusing on self-reported academic performance and choice of university ? International Congress of Psychology ,2016

⑫ 宮本友弘・相良順子・鈴木悦子、女子高校生の学力に対する自己評価バイアスと大学受験行動、日本教育心理学会、2016

⑬ 相良順子・宮本友弘・鈴木悦子、 女子高校生の学力と学力認知および価値観との関連、日本教育心理学会、2016

⑭ 相良順子・宮本友弘、思春期女子における自己評価と学習への自信、日本発達心理学会、2015

⑮ 相良順子・宮本友弘・鈴木悦子、中・高校生女子の学力と学力認知－自己評価との関連－日本教育心理学会、2015

⑯ 相良順子・宮本友弘・鈴木悦子、中・高校生女子における学力の過小、過大評価－達成動機と賞賛・拒否回避欲求との関連－、日本心理学会、2015

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：宮本　友弘

ローマ字氏名：Miyaoto, Tomohiro

所属研究機関名：東北大学

部局名：高度教養教育・学生支援機構

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：90280552

研究分担者氏名：鈴木　悦子

ローマ字氏名：Suzuki, Etsuko

所属研究機関名：聖徳大学短期大学部

部局名：保健センター

職名：教授

研究者番号（8 桁）：10352676

研究分担者氏名：川並　芳純

ローマ字氏名：Kawanami, Yoshizumi

所属研究機関名：聖徳大学
部局名：児童学部
職名：教授
研究者番号（8 桁）：70258953

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。